

淨土

四月号



法然上人鑽仰会

昭和二十四年四月二十八日
昭和四十四年三月二十五日
運輸省（特別授受記録）第三五二号
印刷 昭和四十四年四月一日発行

第三十四卷

第四号

念仏信仰のバロメーター
家康の日課 念仏

西村 清氏所蔵



家康が日課念仏を書きとめたものは沢山残っている。これらはみな慶長十七（一六一二）年家康七十一歳のときのもの。彼は日課に念仏をし、これを書きとめていった。中には所々に「南無阿弥家康」と書いたものもある。日付がそろってないので、毎日書きとめたかどうかはわからない。けれども日付と日付との間は少くとも二十枚、多いのになると三千枚もあり、一枚が五段でおよそ五十行ぐらいになっているところから考えると、一枚平均は二百五十で、一日二千枚とすると、五千遍書いたことになる。これは大変なことである。日課念仏は口で唱えるもので、必ずしも書くものではないが、それを称えながら書いたというところに特色がある。

家康が秀忠夫人崇源院にあてた手紙によると、彼は晩年六万遍の日課念仏を唱え、疲労のため、一万遍へらして楽になったといっている。いずれにしても彼の念仏信仰はナマクラではなく本物であった。

（玉山成元）



— 目 次 —

表紙「花まつり」松濤達文画

祖山の春……………賀幡亮俊…(2)

花まつり

……………山口諦存…(6)

お歌をいただく……………(9)

座談会 仏教・社会・人間

武田泰淳・宝田正道・佐藤密雄・竹中信常…(10)

人生のふかみ

……………宮林昭彦…(15)

アメリカにおける開教師を終えて

……………伊藤正穂…(18)

四苦八苦⑥欲望の果て(所求不得)

……………渋谷賢応…(22)

書 感……………須藤隆仙…(24)

昭和元禄……………古賀秀宣…(25)

新刊紹介 「創価学会—その性格と活動」

……………藤井正雄…(26)

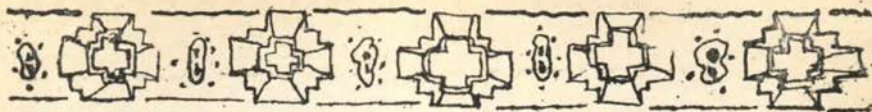
和訳三部経法蔵菩薩の願いと決心

……………村瀬秀雄…(28)

おぼつかなたれかいひけんこまつとは
雲をさゝふるたかまつの枝

法
然
上
人
御
歌





—知恩院浄土宗学研究所員—

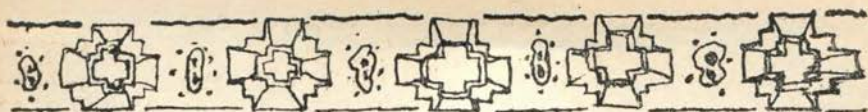
—賀 幡 亮 俊—

北山はきびしさ、西山は寂けさという言葉にふさわしいけれど、観光ブームに煽られた東山は、訪れる人のなんと多いことであらう。それというのも、京都の古都らしい面影が街の周辺部にかぎられ、他府県と隣接する交通の便が、現今の東山々麓の賑わいを助長しているようである。

市街の中心を貫ぬく動脈とでもいえる烏丸通には、ありふれた近代ビルが個性を失って乱立しているだけで、ひややかなコンクリートの感触は味わいが無い。繁華街、商店街の主要路は河原町通と四条通であるが、軒なみのウインドウには其の店なりの配慮が施されているのだけれども、全体としてはケバケバしく、流行モードに鈍感な私には肌が合わない。それでも時にはデパートに用足しをせねばならないし、河原町で食事をすませることもある。物理的な要求を充たしてくれる便利さは、私の生活においてもこのあたりとは関係が深い。これより少し東へ進むと、四条小橋のあたりからずっと東大路まで、四条通の両側の一劃はいわゆるお茶屋が軒を並べている。

南側の赤壁は、忠臣蔵に出てくる赤穂の浪士大石内蔵之介良雄が遊んだという茶屋一力である。一説には、中書島にあった一力がそうであるとも言うけれど、秀吉の頃に栄えたというものの、今は酒造りに漸く活気を支えられている伏見よりも、山科に近い祇園の一力に軍配を上げたい気分がわく。

名ばかりの貧弱なほど狭い国道一号線東大路通を横ぎると、東山山麓につづく一帯である。幕末の動乱が終り、徒党を組んで殺気をただよわすことは、再びおこるまいと思われる。東山山隈ではあったけれども、第二次大戦後のメーデーの復活は、京都における労働者の集いに、円山公園が利用されることを余儀なくしたのである。時には赤旗を先頭に、全学連の京都支部が隊を組み、平和を叫びつつ円山を目指して流れこむこともある。先年完成した岡崎の京都館会では、随時に音楽会や文化講演が公開されるなど、新鮮な情熱が湧



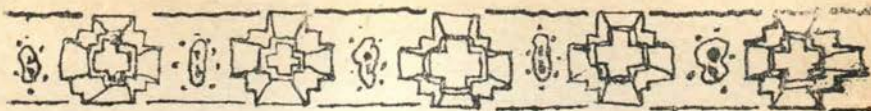
春の山の祖

く。

東山は、地理的条件が構成する環境のよさから、幸か不幸か時の推移更新に、目を掩わ
せてはくれないのである。南は稲荷山にはじまり、北は比叡のお山につづく東山連峯は、
誰かがフトンきて寝たる姿などと言うたけれども、本当は途方もなく目まぐるしい栄枯盛
衰の変貌をうちにやどしているのである。

先ず商売繁盛という現世利益をうたつて全国的に信者層が厚く、参詣人が絶えない稲荷
神社がある。その昔、隣接の神に借地を申し入れ、口上手に広大な地域を欺むき取つたと
かいうことで、いまだに春祭りの御輿が旧藤森神社の氏子の町を御通りのときには、稲荷
大明神もさすがに肩身のせまい思いをされるといふ、神話が語り伝えられているのも面白
い。

稲荷山につづいて太閤平の突きあたりの山頂に、一代の英雄であつた豊臣秀吉の廟があ
る。秀吉は三河國中村庄に生れ、足輕から次第に出世榮達し、織田信長の素志を継いで天
下に号令した。黄金造りの茶室に利休の娘お吟を召して断られたことは有名であるが、こ
のこと以外には彼の意にそわないことは、全くなかつたようである。太閤と称されるよう
になつてからの彼は、意のままに振舞い、名譽欲や物質上の欲望は勿論、人間のあらゆる
欲望を満足せずにはおかなかつた。しかし彼とても人の親、我が子愛しさの故に、臨終近
い頃には煩悶して、徳川をはじめ諸侯の援助を要請している。しかし若冠秀頼が徳川を後
見として天下を治めるには、周囲の諸侯の権勢欲が高潮しすぎていたようである。また秀
頼が政治家としての識見を備えるまで、時を与えなかつた世間は、すべてエゴイズム以外
のなにもでもなかつたと言わねばならない。時は過ぎ、明治時代の内外に渉る政変は英
雄主義を助長することとなり、日清戦争の戦勝が、秀吉に対する英雄崇拜を再燃させたよ
うである。即ち、国内を統一した秀吉は再度朝鮮に派兵し、加藤清正によつて決定的に占



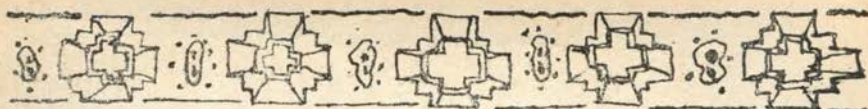
領を全うさせたという、朝鮮征伐の功をねぎらう意味であろうか、明治政府の要職にあった人の有志によって、大きな五輪塔が建立されている。其の廟所は、何百段かの石段を登りつめた、市街を一望しうところで、廟の門は総樺の豪勢なものである。戦前（日華事変頃）には常によく手入れがゆきとどいていて、偉大な人物が永眠するのにふさわしい環境であった。それから二十余年の後、幼い頃の思い出をたどって、この廟所を訪れたとき全く荒廃そのものをみたのである。

武力をもって築いた地位はやがてくずれ、権力による支配は、永続するものではないことを現実に教えられる。ただ真実と真心のふれあいにのみ、永遠のつながりがあることに気づくのである。

太閤廟から大谷の墓所を隔てて清水がある。清水寺は靈験で信仰をあつめていらつしやる観世音菩薩と、その前方に組まれた木造の舞台で知られている。清水から北へ、靈山観音・円山公園・知恩院・青蓮院・平安神宮というコースは、京都でも数少い散歩道である。これらの多くは市内観光に指定されており、春夏秋冬の別なく人々は集散する。いまや、室内の温度がオールシーズン適温になりつつあるのと同じように、観光客にも季節による増減はめだたなくなつたようだ。

そこで宗教関係者は、観光を目的に訪れたお客に、宗教が果す社会的意義を認識していただくよう、心をくばらなければならない。祖山もその例外ではないのであって、信者に接しては勿論のことながら、信者でない訪問客に、阿弥陀仏の信仰に生きられた法然上人の、教えに生きる歓びを印象よく伝えたいものである。

重々しげに説かれる法話や、壇上から語られる講演も、それはそれなりの意義はあるけれど、主催者側からの一方的な語りかけだけではなしに、話し手と聞き手との、飾らざる対話ののぞまれるのではないだろうか。宗教は本来個人の救済に眼目がおかれる。個人の



苦悩は、最大公約数的な悩みの範疇にとどまるもののみではない。公開の席では質問をばかすることもあろう。公開ではない人生相談が、念仏のころによって常設され、世間に光りをそそぐ役割りが果されなければならないのではないか。ただ、人員の不足から、或いは寺院維持の経済的理由から、個人的に相談の時間を持ちえないという、寺院の在り方に問題がある。

伝記によれば法然上人は常に市井の男女を集めて法話をし、共に念仏に励み、個人指導も熱心になされたという。私たちは偉大なる宗教家として法然上人を讃えることの意味を仰仰しい遠忌記念や御忌会の行事だけにおきかえてはならない。

私たちは、法然上人の偉大さ念仏のありがたさを知ったら知ったように生きなくてはいい。念仏の教えなる真理が凝結したところを、念仏として受けとめたのであるならば、念仏によって真実が顕現していかなければ、法然上人の教は生きてこないのである。念仏の声するところ、世間に横溢する嘘や虚偽が影をひそめ、やがて消えてゆくことを実証するであらう。

人がめざめなくても季節の春はやってくる。けれども祖山の春は自然にやってくるのではない。人が念仏の信仰にもえるとき芽をふき、華を開かせる。人が念仏に生きようと志向するとき、春は訪れる。この春は、自然現象に拘束されることなく、世界情勢の変動に支配されることがもない。

私たちが念仏を実践することから、永遠の春がやってくる。念仏によって顕現する祖山の春は、地域的にも境界線がない。宗祖のお言葉にもあるように、念仏の声するところすべて祖山であり、念仏に生きる人が多くなれば、それだけ祖山の春は、拡大された意味において息づくのである。



花まつり

——明石・光明寺住職——

山口 諦 存

かじかみも奈しや朝づとめ

ことしの冬は長い余寒と思わぬ豪雪をもたらし、いくたびも春待つ心をいらだたせました。きびしい冬の朝づとめは両手がかじかみ手先が冷たいよりも痛さを感じます。

しかし冬の朝づとめもやがて訪れる暖い春の光に回り会う喜びと、今朝も又み仏に仕える身の幸いを思いますと、かじかみもみ仏のお蔭とうけとれることうれしく思われるのでありました。

梅も過ぎ南からは花だよりがしきりに聞かれ、山笑い野に陽炎が立ち初めますと、もう花のうわさと共に四月の声を聞き、とざされた冬から明るい春への喜びもさることながら、四月八日の花まつりが一層うれしく迎えられるます。

花祭見聞くもの皆光り待つ

象の綱伸びてすすめり花祭

「俳句歳時記」をひもどきますと、このような楽しい句があります。

「花まつり」には、もう見るものともより、聞くものまでがすべて春の光をまとうま



ことに麗かなものがあり、きらびやかな衣裳の雅児が、木製の白象に花御堂を乗せ長い綱をひきながらゆつくりと行列が進みゆく光景は、お釈迦さまのご誕生を祝う美しく美しい春の行事であります。

この「花まつり」は、もともと仏生会（ぶつしょうえ）灌仏会、降誕会、浴仏会といひ、わが国におきましては推古天皇十四年（600）大和の元興寺（がんこうじ）に、初めて行われたと伝えられていますから既に千三百六十年の長い間、仏教徒のゆかしい法会として伝承されてきました。

さて、お釈迦さまのご伝記は現在十種ほどありますが、その中で最も有名なのは「仏所行讃」（漢訳）であり、紀元一世紀頃のインドの仏教詩人馬鳴（めみよう）の著述であります。この「仏所行讃」を和訳した「仏陀の生涯」には、文きわめて美しく、仏の生涯と人

格をたたえ、その教えを歌っています。

いま、浄飯王（シュッドダナ）を父とし
摩那（マヤー）を母とし釈迦族の皇太子と
して、ルンビニーの園に生れられた歴史的な
光景を引用してみましよう。

七仙の星宿の如き彼は

惑（まど）はず、広き歩調（あしどり）で
高く浮彫した蓮の標（しるし）を地に打ち
印（しる）し、

かくも確かな七歩を歩んだ。（三三）

「我は覚悟（さと）りの為、世の至福（さ
いはひ）の為生れた。

かくて、之は我が最後の生である」
彼は獅子の歩みをなし、四方を凝視（みつ）
め、

かく勝れた、理（ことわり）に充ちた言葉
を宣（の）べた。（三四）



二条（ふたすぢ）の水は天から落ち、

月光の如く輝き、寒暑の力もち、

彼の身に快楽（けらく）を与へようと

比（たぐひ）なく賢く、仁慈（やさ）しい

彼の頭に降った。（三五）

と、うたいあげています。

輝く星座の七星のように、蓮のしるしをつ
けて生れながらに七歩し、四方をみつめて

「降誕宣言」をのべられた。時に天からは二

条の喜びの水がこの太子に幸あれかしと、頭
上に降りそそいだと、馬鳴は誕生を讃えて
いますが、わたくしたちは太子が天地を指さ

して「天上天下、唯我独尊」と宣言せられた
と教えられています。

これは他の仏伝に

「我は世の第一人者である。我は世の最も

優れた者である」

と、のべられているところから後世この

ように表現が変わったのではないかといわれま
す。しかし、太子がご誕生と共に七歩し四方
を見つめ「誕生宣言」をせられたとは、余り



にも修飾が過ぎているのではないか、このよ
うな誇張された仏伝は信ずることができない
という人々があるかも知れません。ここで
「仏陀の生涯」の最後の韻文をみることにし
ましよう。

牛王に似た眼で安らかに視、獅子の歩行

（あゆみ）を静かに運び

衆生を救う為に迦戸（カシイー）城に往き

歩歩に獣王のやうに顧みて、

世尊は菩提樹を眺めなされた（二〇九）

悟りを得て仏となられた釈尊が五人の比丘

のために、初めて法を説こうとしてガンジス

河の流域迦戸城内の鹿野苑に向われる、堂々

とした態度が余すところなく歌われていま

す。慈悲深い目ざしを牛王の眼に、歩行の静
けさを獅子になぞらえています。このような
表現をすることのできるのは、仏であるから

でありましょう。

經典には大地六種に震動したとか、歩かれることに大地がくぼみ、み足を上げられるともどのように平になったという記述がされていますが、このようなことはすべて仏の人格を最も余すところなく現しています。このことばよりほかに記述のすべがないではありませんか。仏のみ姿をただ拝するだけで、一の説法も聞かずに草の風になびくように帰依し、供養した人々が無数にあったことは事実であり、仏誕以来約二五二八年といわれます。今日まで、人類の師として生きていられます。釈尊のご誕生に、いろいろな奇瑞のあったことはむしろ当然であったとさえ思われます。ましてや「之は我が最後の生である」との宣言は、この後は生死のない悟りを得る人として世の幸福のために生れるべくして生れたと

の大使命の自覚であります。

実は、わたくしたちがこの人間界に生をうけたことも不思議なことであり、やはり生れるべくして生れたものであります。このわたくしは全世界の中にただ一人の存在であり、その人間的な価値もかけがえのないものであります。「天上天下、唯我独尊」とはこのことであります。

釈尊が生涯に説かれた教えは多種多様ではあります。その帰結は人格を完成して悟れるもの、仏に成ることに外なりません。

法然上人は成仏の道として釈尊の教えの中から、特に念仏の道を選びこれこそ釈尊の本懐であることまで強調されました。深い教理を究めることも、行を苦修することもみな成仏への過程ではありますが、末法といわれる今日の時点からは成仏の目的を達することは困難であって、労あつて証の少ない仏道であると看破されたのであります。凡夫が仏となるために特に釈尊が念仏の道を開きおかれたのであります。

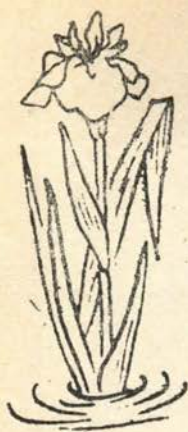


仏の名を南無阿弥陀仏となえ、救いによつて仏の国に生れやがて悟りを開き、再びこの人界に還り来て苦悩にあえぐ人々を救い、共に浄土へ帰る信仰こそ、法然上人のうけとられました成仏道であります。

釈尊の生誕せられましたここアジアの地に、今日も又戦火が続いています。又、日本をとりまく国際状況も極めて複雑な様相を呈しています。

生涯を人々の幸福にささげられた釈尊の教えは、いつの世にもいつの人々にも正しい道であります。殺してはなりません。すべてのものを生かすところに、み教えは生きているのであります。

末法の法雨に濡れん花祭



お歌をいただく

おほつかなたれかいひけんこまつとは

雪をさふるたかまつ枝

(勅修御伝第三十)

「おほつかな」はおほつかないということ、心もとないということですが、ここでは不審であるという意味です。「こまつ」は小松という地名です。そこでお歌の意味は

この地を小松などと誰が名づけたのであるうか。まことに不思議なことである。現にこの地になると、大きな松があつて、その枝は雲を支えるばかりに高く伸びているではないか。

ということになります。このお歌はただそれだけの一興のままに軽くお詠みになったものでありましょう。

勅修御伝第四十四に

「上人小松殿の御堂におはしましけるととき、元久元年三月十四日に、律師参給けるに、上人後戸に出むかひ給て、ふところより一巻の書をとりにだして、これは円輪殿の仰により

て、えらひ進するところの選択集なり。のするところの要文要義は、善導和尚浄土宗をたてたまふ肝心なり。はやく書写して授覧すべし。もし不審あらばたづね問べきなり」

とりあますので、小松殿は選択集を公にした場所として知られています。更にまた上人が遠流になる時も小松殿から発たれました。即ち勅修御伝第三十三に

「官人小松谷の御房にむかひて、いそぎ配所へうつり給べきよしを責申ければ、つるにみやこをいでたまふ」

とあります。従つて小松殿は上人にとつての一大事のあつた場所ということができまゝす。また元久元年御年七十二才から承元元年御年七十五才までの間は、念仏停止の奏上があり終いに遠流となるという法難の時代でありました。こうした事実を考えながら、このお歌を拝見しますと、どうもここである小松とは上人ご自身のことをいいあらわし、そして高松というのは念仏弘道がいろいろと物議をかもし大問題としてとりあげられ、当時の仏教界を揺り動かしながら、一方にはますます庶民の信仰として拡つてゆく様をあらわし

ているように思えます。軽く詠われた上人のお歌に対して、余計なせんさくをすることは許されません。ましてこのように思うことは上人の自負心があらわれているようで、真実と違うというより上人に対して全く申訳ない考え方でありまゝす。

しかし上人は決してこうした意味でお詠みになったのでないと知りながら、どうしてもこのような連想が浮んできます。

上人ご自身は

「私は烏帽子もきぬ法然房也。黒白をも知らざる童子の如く、是非も知らざる無智の者也只念仏往生を仰いで信ず」

と申され、更に「すへすすへすも傲慢の心をおこすべからず」と厳に戒められています。従つて専修念仏の信仰を高松に喩えるようなことはあり得ないことであります。

しかしながら燎原の火の如くに念仏が当時の社会に拡がって行つた事実を思うと、どうしても小松と名づけられるような上人の存在が実は雲を支える高松となつて一般の信仰を支えたことに結びついて思えます。

「仏教と社会と人間」

武田 泰淳氏



宝田 正道氏



竹中 信常氏



佐藤 密雄氏



現実と未来の
すがたをもとめて

現代中国の仏教のすがた

竹中 「浄土」は宗門的な雑誌で封鎖的な面が強くだんだんこり固まっていくような気がいたします。この点を打開しなければならぬのですが、そこで外側からの批判として内外共に熟達している武田・宝田両先生に素直なお話をうけたまわりたく思います。さし当って話しの糸口として、武田先生に本来の意味にはそぐわないとは思いますが、今日問題になっている日中宗教交流についてお聞きしたいと思います。現在中国では一般大衆が共産制の中で宗教をどの程度理解しているか、具体的にはお念仏を唱えているのでしょうか。

武田 具体的には見聞しておりません。お線香あげたり、お供物をそなえたりするのは見ましたが、ナムアマミダブツの中国的な唱え方、ナムアマミドウフという言葉を聞いたことはございません。日本と大きく異なることは仏教学がない点です。これは日本の方がはるかに勝れているのですが、中国では革命につ

く革命で安定した学問ができなかったのです。日本ではもとは中国にある、つまり各宗の祖師方の修道の場は中国にあったのですが、現在では仏教学の面、信者数の面等において中国が勝れているということはできません。現共産制下の中国では、国策として欧米の勢力の侵入をふせぐためキリスト教を警戒しております。道教・儒教も同様なのですが、仏教のみが国策にかなうものであると受け入れられております。ただ人民が現在の教育制度のもとでいかに理解しているかは別のことで、史蹟の保存も孫文の革命の時よりは守られております。ただこれも国策上のことであって、一般の人々個々が、いかに受け取っているか聞く必要があると思います。私は文学者の代表として通り一べんのところのみの観察ですから、仏教学者が実際に見聞する必要があるのではないのでしょうか。

竹中 しかし、現在では困難ではないのでしょうか。

武田 忍耐強く行えば、そのようなことはありません。私が実際に見たのは白馬寺ですが現在でも僧侶になりたいという人は多勢おり

ます。これらの人々はほとんどが農耕民です。現に日本の大正大藏経が置かれてありましたが、これを読む力があるとは思われません。ただ僧侶になりたいという気持があるのです。日本のように各宗派の哲理を学ぶ学校があるのとは違い、たとえ欲してもその場を設ける余裕がなかったのです。

竹中 それでは、そのような人々はどうして僧侶になりたいのでしょうか。

武田 はつきりは分りません。ただ心の中に何かがあるのでしょう。教えられたというのではなく、何かにすい寄せられたという面があるのではないのでしょうか。

在家の仏教

佐藤 中国では僧侶になるということは供養を受ける身分になるということだと思えます。聞いた話ですが、蘇州の寒山寺では、毎日施主が変つて法要が営まれているそうです。この供養をかさねていくこと、つまり在家仏教が中国仏教の立場と思われるます。お釈迦さまも、在家仏教の立場として施論戒論生

天論をお説きになっております。施論とはほどこしですが、その対象は出家です。この施しをし、五戒を守れば来世は天に生ずるという思想です。かならずしも極楽、涅槃に生れるというのではなしに、現世、来世の快樂を大放棄した出家に施しをすることによって、来世により良い生活があるとする在家信者の思想を受け継いだ中国仏教が、現在どの様に理解されているかということです。現在は香港に移ったとされておりますが、上海にあった法界学園という所で、一部の居士林の支持のもとに日を限つて華嚴、四分律等仏教々理の講義がなされ、これに参会した僧侶には食物の施しがされたそうで、細々ながら今日まで伝えられているのが現状だと思われま

竹中 そう致しますと、中国仏教をささえてきたのは在家仏教という居士林というか、一般庶民の手によってなされてきたと理解できそうです。今日日本でも、その傾向が強くなりつつあります。現在中国では、労働層からの出家があるといわれましたが、日本では仏門に入ることとはどの様に理解されているのでしょうか。

武田 仏門に入るといふことはなまやさしいことではありませんが、現勢力下の中国で、仏教徒であるから仏門に入るといふよりも、

日本で、仏教徒であるとして仏門に入ることにより易しいと思います。これは何も悪いことではなく、この様な道が開けているのは世界中で日本だけであると思われまふ。小乗仏教の国、例えばセイロン、ベトナム等に於いても仏教はさかんですが、それは学問的な意味での保障がないのみならず、近代社会における僧侶という形もないのです。封建的な形の中に置かれているのです。現在の日本に於ける仏門のあり方にも問題はあると思いますが、少なくとも仏教に関することは日本を中心になさねばならないと思います。

世論に対する仏教徒の心がまえ

竹中 日本においては仏門に入る機会も多く比較的容易であるといふことですが、しかし世論では仏教に対して批判的です。この点はどうのように理解すべきでしょうか。

武田 批判が出るということは関心が強い

めだと思います。日本の仏教徒が自信をなくしたならば、世界の仏教徒は指針を失うことになるといつても過言ではありません。

竹中 私達は仏教に対する批判を概念的のみで把握しがちですが、実際にジャーナリズムの中で、またはその立場からどのように考えていらっしゃるのですか。

宝田 私は僧籍は持っておりますが、第三者の立場から、自由に執筆し、発言させていただいております。私個人の体験から見ますと確かに仏教に対する風当りは相当強く感ぜられます。その一つは仏教というものに對する既成概念が崩れだして来、鎌倉時代、明治時代、現代等、各々の考え方に相違が見られます。現代では形骸的、つまり寺、葬式、僧侶法事等の形の上のみで仏教を理解する人々が多勢いるのが現状です。裏をかえせば、仏教本来の教えに對する理解が乏しく、社会に普及していないことだと思ひます。實際には普及すべき機会、場所がありながら活用されていないのではないのでしょうか。過日三十年ぶりに母校の仏教大學を訪れたのですが、在校生の三分の二は在家の人で、このうち二百人

余りの女子學生が含まれているということでした。その大部分は社会福祉學私に所屬しているようですが、仏教に関心があるからこそ入学したものと思われまふ。しかし実社会に出て後、仏教がどのような形で生かされているかといひますと、形骸的な面のみなのです。本来総合的、文化的、学問的なものであるにもかかわらず、部分的面の理解のみであることについて宗門自体に再考すべき点があると思われまふ。

竹中 確かに形骸化しているのですが、しかし一般の人々は仏教を近代的な受け取り方をする反面、昔からの伝統的な重々しさといった点を尊重していると思ひます。テレビ、雑誌等でもこれらの点を取り上げた企画が多くなされております。ただこれらをどの程度理解しているか分りませんが、現代人の中にこれらの点に對するノスタルジーがあると考へられませんか。

伝統に對するノスタルジー

宝田 ノスタルジーであると共に、稀少価値

であると思います。たまたまめずらしいからニュースになるのであって、仏教がこうした片寄った部分でのみ理解されているということです。一般に広くひろまっていれば当然のことであるという考え方もできるのではないでしようか。

竹中 具体的には今でも僧侶の有髪について壇徒の人々は注目しております。やはり近代的なものを求めながらも僧侶の中に在家と異なった面を求めているのです。

武田 まったくその通りなのです。

宝田 形骸の上からは髪を剃り、衣を着、念珠を持っているのがあるがたい僧侶であるという昔からのイメージがあるのですが、実際には儀式以外での僧侶の生活はどうであるかということについて矛盾を感じている。この点で一般社会にいろいろな影響を与えているのではないでしようか。

仏教の社会へのアツピール ——葬式仏教の肯定——

武田 この点が今一番問題にすべき所なので

す。ジャーナリストイックない方をすれば社会に貢献することですが、仏教のみならず、キリスト教ではこの点が大変深刻な問題となっております。例えば、アメリカの大統領選挙を例に取りますと、立候補者がカソリックであるか、プロテスタントであるか大きな問題となるのです。日本では、別に禅宗であろうと、浄土宗であろうと、さほど問題にされません。この寛容の態度は決して悪いものではないと思います。この点を一般的に分りやすくいうと、先程の宝田先生の意見になるのです。この点から、私は葬式仏教を肯定いたします。その時において、何をするか、決定するか、という点で責任を取つていなければ、僧侶はお経を読めないのです。禅宗のお経を読むか、浄土宗のお経を読むかは問題外で、強いていえば仏教というものを葬式の中にもっとさかんにできないのが残念なことです。表現の自由な日本の中で、こういうことをやってはまずいであろうか、反仏教的であろうか、ということにこだわりがあるのです。

矛盾をハダで感じとる大切さ

武田 私自身まったく自由な立場で小説を書いておりましたが一度たりとも宗門から破門されないのでした。ギリシャ聖教などではまったく考えられないことです。この点私達は感謝せねばいけないと思います。ただ若い世代がどのように考えているかということです。過日、NHKで、アメリカのホッパーという神学者と対談したのですが、彼は、神が存在しないというところが、信仰の出発点である、とするのですが、サルトルもカミュもドストエフスキも決して神を信じておりません。ことにカフカなどは神がいらないということのために小説を書いております。しかし、これをも包含して神の存在をいわなければ、我々の立場はないとしておりました。キリスト教の一番新しい先端の人が、それほど苦しんでいるのですから、私達とて苦しむのが当然なのです。そこに神なり、仏なりの存在をハダに感じるようになるのです。先に申しました、矛盾が大切だということは、そういうよ

うなことがあるからこそ、新しい神を発見し、新しい仏をおがみたいという気持ちが出るのであって、前の通りでよければ何のために法然上人が念仏宗を開かれたかというそのシリアスな気持ちがなくなる訳です。私達の置かれている状態は法然上人がなやまれたと同じ状態に置かれているのです。法然上人はこれらのなやみを正面に受けとめた訳ですから、私達も素直にたち向うべきだと思います。

法然上人のおなやみ

竹中 そうしますと、私達は法然上人のなやみを追体験している訳になりますが、それを自覚しなければならぬことになりますね。

佐藤 商売の問題ではないのです。精神の問題なので、すなわち大変苦しいものなのです。そこに極楽がえがかれることになるのです。

宝田 法然上人自身がおなやみになったことを宗門全体がなやむべきなのです。なかには個々になやんでいる人々もあるでしょうが、宗門という組織がありその中で生きているとすれば、そのなやみをもった人々が宗門全体

の問題として取上げり、法然上人が解決をみられた方向に共に歩めば、そこに同様な解決の糸口が見出されると思います。

竹中 しかし先走りますが、なやむことがあってよいのであって、これを解決してはいけないという考え方が出るのではないでしょうか。

悩みは自分が解決するのではない

武田 このことは大変重要なことです。解決してはいけないというのではなく、解決させて下さるということです。我々は自力ではないのです。解決するという力が何ら解決をもたらしえないからアミダ様があるのです。解決できるという人々だけであつたならば、いかなる正しい主張に従つても、裏切られるのが必然です。我々が解決できないということになやんでいれば、いずれからかお声がかかってくる。つまり我々が解決を見るのではなくアミダ様が見させてくれると考えるべきなのです。

竹中 解決するという考え方は自力となる訳

ですが、「できない」という考え方が大切なのですね。

極楽と地獄

武田 そうです。できないということが解決になるのです。この「できない」ということは仲々いいえないのです。私達は生きているのです。ですからいろいろな行動がとれるのですが、それがどの様になっているかを考えるか否かによって、極楽という姿が見えるのです。通常私達の見ているものは地獄だと思えます。その地獄の様相はますますはつきりして来るのです。それに引きかえ極楽は遠のくばかりです。すでに神仏の手ざわりが解れば、そのまま死してしまつてもよいことになるのです。しかし私達が信じられないからこそ、そこに宗教が起るのであって、何か命令されて宗教を信じている人はおりません。

竹中 以上の事項は大変重要なことでありながら仲々いいつけなかつた問題です。今後この点について十分に考えると共に大きな課題となるべきものと思われまふ。(つづく)

人生のふかみ

宮 林 昭 彦

一人の人間が生れてくる。という、ただそれだけの事実
は、きわめて何んでもないことのように思われる。

しかし、実はこれほど厳かな事実はない。一人の人間が今
生きている。生きつつあるという事実は、すでにそのことだ
けで、この上もない厳かな事実である。

わたしたちは、今現に生きている。そして生存者が内的に
もつことのできる、あらゆる特権をあたえられている。人生
の喜び、憂い、悲しみ、苦しみ、あこがれ、すべてを経験し
ている。それらの生存者の特権も、またこの上もなき厳かな
事実である。

文学や芸術は、これらの人間の生存、これらの人間生活の
内的な特権をば、もつとも厳かな事実として取り扱ってゆく
ところから生れてくる。云いかえると、すべての文学や芸術

は、人生のすべてを尊しとして受けいれ、人生に存在する尊
きものの片鱗をもみのがさないことを思念している。

その意味は、人生におけるすべてを、そのままに美として
受けいれるところの生活方法である。真の人生の相を、その
根本主義において見分ける生き方である。念々刻々生活の真
の相を凝視することから、わたしたちの思惟を忘れないこと
である。

生きていることはうれしいことである。その生存のうれし
さの底に徹して人生を観るとき、わたしたちは、たしかにか
すかではあるが、人生の深さについて、無限さについて、あ
りがたさについて、一種の宗教的な感激を見出すにちがいな
い。

また一面から考えて、生きていることは寂しいことであ

る。頼りなことである。その寂寞、その頼りなさの底に徹して、人生を思惟する時、人生の悠久、人生のかたじけなさについて、宗教的な感激を見出すにちがいない。

わたしたちは、ある種の楽道家たちのように、人生は老病死苦のみに満たされているものと見ることもできない。

正直に、いつわらずに人生を感じる人であるならば、そこに太陽の光りのよろこびとともに、親の死あり、妻子の死あり、友人の死あることを認めないではおれない筈である。むしろ人生にはあまりに多くの悲しみがあり、苦悩があり過ぎる。

宗教は、光明とともに暗黒を、歓喜とともに苦悩をそのままにうけいれ、そのままに尊しとし、ありがたしとするものである。

善はただ人間の世界にのみ存在する。悪もまた人間の世界にのみ存在する。善も悪も人間的なれば尊いのである。

人は、善によって救われるであろう。しかし、もし善のみによって救われなければならないとしたら、はたして一人の人間でも救われるであろうか。

人は悪によっても、なお救われなければならない。法然上人の宗教は、悪人のための宗教である。

人を憤らぬ人間がありえようか。女性を見て思慕の情を感じ

けない人間がありえようか。人を偽らぬ人間がありえようか。人を憤るがゆえに人間である。人を思慕するがゆえに人間である。

このような人間にも、救いの道がなければならない。

凡夫の救いのための宗教である。下根の浄土である。

わたしたちは、凡夫下根の生活の底に徹して、これらの人間的な尊さ、あわれさを刹那々々の人間生活のなかから見出し、味うことによって、人間として生きつつあることを、心からありがたく感ずるのが、宗教的生活である。

そもそも、人間として生れてきたというその一事実は、この上もない尊い機縁でなければならない。

わたしたちが、親をもち、子をもち、友をもつということ、見知らぬ人びとと相接しては、そこにいろいろな人間的な愛憎、思慕、苦煩の情におどり、悩み、憂うということも、人間なればこそ、めぐまれるところの機縁である。

世の中には、世間的に、いろいろ華やかな仕事をしている人びともいる。しかし、これらの人びとは、おおむね、内的な生活を忘れている。その人の生活が幸福であり、明るく、順調であればあるほど、かれの生活は上滑りになり易く、その底に潜むことを忘れがちである。かれはただ、空虚な人生のみを生きている。

一生なにごともしないで終る人がある。しかしかれの内面的生活が豊かであるならば、すなわち、かれが人間生活の底に潜んでいる人生の相について静かに考え、静かに味得することがあるならば、かれは、決して人生を無駄に生きたということとはできない。

かれは、なにごともしなかった。しかし、かれは一生自己について考えた。人生について考えた、内面的生活において悩んだ。このような人間は、尊敬せらるべきである。

今の世の中では、あまりに外的な仕事、世間的な仕事に思いを走らせすぎる人が多い。ある程度まで、それが必要である。しかし、外的な仕事、世間的な仕事が完全なものになるためには、その人の世間的な仕事に光りが添うためには、かれはまず静かな内面の世界を観ることをしなければならぬ。内にあふれるほどのものが湛えられたとき、外にあらわれてくる仕事に無理がなくなる。内に漲るほどの光明が蔵されたとき、外にあらわれたその人の仕事に、尊敬せらるべき、自然さが伴ってくる。

人格のうまみ、人間性のうるおい、というのは、畢竟、これらの内に湛えられた力でなければならぬ。内に貯えられた力が、ありあまるほどになったとき、ひとりりで外にあふれてくる、その自然さをもった仕事でなければ尊敬されるこ

とはない。

人は社会的に仕事をしなければならぬ。しかし仕事とか形而下のものばかりではない。形而上のものも、さらに高い仕事でなければならぬ。

一生一本の草を植えなかった男があるかも知れない。しかし、かれがもし、一生人生について静かに思惟し、静かに思念したとするならば、かれもまた尊敬せらるべきである。

わたしたちは、生きてゆかねばならない。社会的に起きて働かねばならない。

しかし、それと同時に、生きてゆくことの意義、起きて働くことの意義、人間であり、凡夫下根であることのありがたさ、わびしさを、心から感じつつ、生きてゆくことを知らなければならぬ。

わたしたちは、平和な社会に生きている。平和であれば、あるほど、人間の心の奥ふかきものを見失いがちであり、また、ものごとの奥ふかさをきわめることは困難になる。

死を味うことは、生の尊さをかみしめる機縁となり、生命の不思議を感謝することとなる。人の悲しみがわかることは、また人生のよるこびも味いうる人である。

法然上人のお念仏はおのずから人生のふかみを味得せしめてくれる。



アメリカにおける開教師を終えて その二

米国における仏教活動

伊 藤 正 穂

羅府（ロスアンゼルス）市は、他の米国の都市と異なり、平坦で、広大な町である。我々が米国という言葉からいなくイメージは、高層建築であるが、このような見方からするとサンフランシスコ、シカゴ、ニューヨーク等がその代表的都市と考えられる。羅府市は、一見、田舎町という感じさえする。もっとも、最近では、四十何階かの建物がだんだん建てられつつあるが、従来、この町には高層建築は建てられなかった。それは地盤が軟かいからということだ。しかし、今日それが許可されるようになったのは、建築技術の発達によるものと伝えられている。

この広大な羅府市は、有名なフリーウェイ（Freeway）という高速度道路でも象徴されているといえる。最近完成した

サンタモニカ・フリーウェイは、一方が七本の車線もある巾の広いものである。名神高速道路が僅か一車線で、追越車線を入れても二車線よりないと比べて、いかに大きいかが想像できる。この高速度道路をフリーウェイというのは、二つの意味が考えられる。一つは、街内における時速三十五哩（五十六軒）のスピード制限から解放（フリー）されて、その倍近い時速六十五哩（百四軒）まで許されるという意味。もう一つは、名神高速道路に見られるような有料ではない。即ち、どこからどこまで走っても料金はフリーであるという意味である。この高速度道路も、米国東部に行くと、ターンパイク（Turn Pike）といくて有料である。

この羅府市には、およそ十万の日系人がおり、各種日本人

化の集いも多く、夏に行はれる二世 (Niseiweek festival) 週祭は有名であり、テレビで放映された程である。仏教会も盛んであり、市内だけでも七ヶ寺もある。即ち、東、西本願寺、禅宗、日蓮宗、真言宗、高野山、浄土宗の各別院、それに、西本願寺系の洗心仏教会である。

ここには、羅府仏教各宗連合会というのがある。これは、市内七ヶ寺に、単一のロングビーチ仏教会が加わって組織されているものである。ここにおける仏教会の使命は、各種宗教儀式及び行事のみでなく、遠隔の地に住む仏教信者への出張説教、人生相談、更には日系社会における諸問題に対して市当局のよき相談役もつとめる。我々が、ここで知らなければならぬことは、米国は信教の自由を与えていると同時に (仏) 教会、宗教家聖職者には、精神的指導者として、社会的地位を認め、任務を与えている、ということである。私がかつて羅府市立大学に学んだ時、先生に道德教育の問題についてたずねた所、先生は、それは主に教会ですることであるといわれた。勿論、この教育は、家庭、学校の協力は申すまでもない。その中心が教会にあるということは、教会にそれだけの、使命と權威を与えているということがいえる。このことは、また、教会を助け、同時に生かし、利用することでもある。合理的な、米国の分業精神はここにも見られる。それ

は、聖職者の生きがいのあることでもある。少し、飛躍した見方をすれば、一般の学校は、教育、体育を旨とし、教会教育、日曜学校は徳育を旨とするということができよう。

在米中、よく耳にしたことだが、日本から米国を訪れるお偉ら方に、「何故もつとお坊さんを利用しないのか」という質問に対して、ほとんどの人が「お坊さんは頼りにならない」といわれる。なるほどと、うなづける点もある。千年一日の如く、わけの判らぬお経を読んで、茶のみ、日暮れる生活をしている人には、一般大衆からは、どうみても頼りになる人とは思えぬふしもある。仏教会を組織しても、自分の利益ばかりに関心をもっているのは、何ら社会には、それらしい貢献はできないことである。最近の調査では、寺の住職は、職業別に見て、第十二番目となっている。参考までに第一から第十一番目まで掲げると次の如くである。①都道府県知事 ②大学教授、③裁判官、④大会社の重役、⑤医者、⑥官庁の課長、⑦建築技師、⑧町工場主、⑨労組委員長、⑩新聞記者、⑪小学校教師。

しかし、これは一方的に僧侶だけの責任というものではなからう。立派に宗教的活動をしている方々も多い。しかし、社会がこれを充分に評価もせず、宗教活動という地味な仕事の裏にある大きな努力に対する認識もなく、伝統的なものの

みに宗教性を認めて、その他即ち近代化ということには、一向無関心であるという事もよく考えなければならぬことである。うちの田舎の壇家の中には、「お和尚さんは、お経さえ読んでもらえば、それでよい」という人がある。このような一般の無関心、無認識が、僧侶を骨ぬきにしてしまったといえないだろうか。不動産の上にあぐらをかいていた浄土宗寺院は、戦後それを失うことにより、経済的基盤を失い、一般社会における経済の急速な進歩は、寺院経済の必要を満たすこともできず、一部を除いては、自然、外に経済源を求めて行く傾向となった。そしてこのことは、真の意味の宗教的活動にも大きな影響を与えている現状である。

さて、話題をもとにもどして、米国における仏教活動を眺めて見ると、主なものには次の二つがある。一つは米国仏教団(B.C.A.)他は羅府仏教各宗連合会である。米国仏教団は、西本願寺系の全米にある約六十ヶ寺によって組織されているもので、日校、青年会、婦人会等が、地域的或は全国的に合同研修会を開き、米国における仏教、真宗の基礎づくりに進んでいる。

一方、羅府仏連では、色々な催しを通じて地域社会の仏教徒の為に貢献している。特に花祭りは盛大である。お釈迦様の誕生を祝うこの催しは、四月八日に近い日曜日に、各仏教

会の老若男女が集ってにぎやかに行なわれるが、記念法要は日曜学校合同礼拝が、朝九時半から、二ヶ所で同時に行なわれ、これには、約二千人の子供達が集まる。これがすんで、仏教青年会の英語礼拝が十一時から、そして午後には、一世の日本語の記念法要がある。日校生のためには、ポスターコンテストが行なわれ、子供たち一人一人にお釈迦さまの誕生の意義を考える機会を与える。また花祭り前夜祭も計画される。

羅府仏連は、この他、優秀な青年仏教徒に奨学資金を与え又羅府加州大学(U.C.L.A.)の東洋図書館へ仏教図書費として毎年五百弗(約二十万円)を寄附している。この援助もあって、昨年より、この大学では、仏教学の修士課程が設置された。これは、米国における劃期的なことで、米国広しといえども、仏教学での修士コースはウスコンシン大学に次ぐもので仏教研究に対する米国の志向を示すものであるが、同時に、仏教が世界に飛躍する大きな礎となると思われる。

この他、仏連の仕事は、一週間の中、四日(火木土日)ホームキャストという日本語放送を通じて、朝晩十五分宛、仏教放送をしており、毎週土曜日には、日系新聞「羅府新報」に仏連欄を設けて、一般への伝道に資している。これらは、主に、一世向けのものといえるが、将来の仏教徒が即ち、二

三世に対する布教活動として注目されるものは、毎年、夏休みを利用して、行なわれる夏期仏教徒子弟修練のキャンプである。

これは、九才から十二才までの日校男女生徒に対して、十日間町を離れ、親元をはなれて、深山幽谷における野外生活を通じて、仏のみ教えを学んで行くものである。

キャンプの生活は、毎朝七時に一斉起床、朝の屋外礼拝に始まる。この礼拝で参加各開教使が、その日の生活信条（テーマ）について、簡単な法話をし、これは、朝食後、三十分乃至四十分の間、各グループに分かれ、年令に応じて、更にくわしく検討する。このテーマは、もちろん、仏教の根本思想である八正道、六波羅蜜、三法印などである。この宗教の時間がすぎると、原則として、一時間の割で、水泳、弓技、ハンドクラスト、乗馬、ハイキングなど、子供のための楽しいプログラムが用意されている。夜は、映画、フォークダンス、天体観測、オーバーナイトハイイク（キャンプ場からはなれ、他の山の中で露天に一夜をあかす）ことなどがあり、これらのものがキャンプ期間中、色々にくみ合されて、子供にねに楽しい雰囲気の中、楽しく仏のみ教えを学んで行こうとするものである。一日の行事が全部終ると、子供たちはみ仏への感謝の言葉「わたくしたちは、悟りへの道をお示め下さい

ましたみ仏さまに感謝いたします。わたくしたちは、この尊い道を、毎日あゆむよう努力いたします。おやすみなさい」を斉唱して、消灯ラッパの合図で床につきます。

この十日間、直接の指導にあたる人々（カンセラー）は、仏教青年会の方々である。公立学校の教師をしている人も多いが、仕事をしている人は、夏期休暇を返上しての参加である。この熱心な仏教青年会の人々の献身的奉仕は実を結び、参加者は、年と共にふえ、昨年一九六二年の参加者は、百五十名に達し、現在のキャンプでは、これ以上収容出来ない所にまで来ている。この行事は、すでに十三年続いており、幸いにして、私も過去八年間、開教使として参加させて頂いた。最後に青少年教化委員会について一言述べたい。これは仏教連傘下の各仏教会より、特に青少年教化を担当している開教使が一人ずつ代表して組織されたもので、特に仏連の行事中、二、三世に関係のある諸活動を検討し、将来の米国仏教徒の育成に努めているものである。毎月一回のわりで集会を催し、色々な関係事項を討議する。花祭り、成道会等の合同英語礼拝の研究、前述したサマーキャンプの宗教プログラム、の作製、十代、二十代に対する布教対策等々を検討する、アメリカにおける仏教は、組織的に、信徒、開教使が一体となつて、着実に、その基礎を築きつつあるのである。



四苦八苦 — その八

欲望の果て（所求不得）

渋谷 賢 応

思うこと一つ果せばまた一つ

三つ四つ五つ六つかしの世や

などと申しますように、人の欲望には限り

がありません。無理な欲望を追い、満足しよ

うとする心を払いのけて苦悩の中を走りつづ

けているようにさえ感じます。さて死に臨ん

で、果すことのできなかった無念さやるせな

さにさいなまれつ、この世を去る。これが人

生かも知れませんがいかにもはかないお粗末

と申さざるを得ません。一体「求むる所を得

ざる」苦しみは、求むる所の外界にあるのか

内心にあるのか、どちらがどのように重く扱

われるべきなのか、深く自らを省みつ、お釈

迦さまのお説を伺って見ましょう。

ある時お釈迦さまが祇園精舎におられた時
アーナンダ尊者が坐禅の修行中、ふとこのよ
うな考えを起されました。

「この世の中の人で欲望を満たされた人は少
く、また欲をいといきらつて命終った人も甚
だしい。そのような人にあまり出会わないの
はどう言うわけであろう」

こう思つて座より起ち、お釈迦さまの所に
往つてこのことを問ひ質されました。お釈迦
さまは大きくうなずかれて

「その通りだ、まったくその通りなのだ
よ。世人は欲望を満たされるものも少く、ま
た満たされたと思つて命終るものも少いの
だ。昔ムッダーパシッタと言う王さまがあつ
た。彼はすばらしい王で大軍をもつて天下を

この太平の世にあつて、なおも人は苦しみな
やみ、一日として満ち足りた安楽な日とて
ないありさまでございます。どうしてこうも
あくせくして過さなければならぬのか、ど
うしてこうも満足した感謝の生活ができない
のか、自分が自分に愛想がつきることしばし
ばでございます。これと言うのも自分が思う
ようにすべてが運ばぬいらだたしさからとで
も申しましょうか。何んとしまして「思う
にまかせぬ世の中」でございます。

ひるがえつて考えて見ますと、人は人それ
ぞれに案外「思うにまかせ」ているのですが
その方はあまり意識せず、しがつて感謝の
気持もなく、ただまかせぬことのみ追い求め
ているのかも知れません。

整御して七つの宝を得た。七宝とはすばらしい車、すばらしい象、すばらしい馬、すばらしい珠、すばらしい女、すばらしい家、来すばらしい軍隊であつた。そしてその国を治めるのに刀や杖を以てせず、法によつて教育し、国民に安樂を得しめたほどであつたのだよ。

ところがこの王にも野望があつた。自分はこの国だけに留まてはならない。このエンブ洲、すなわち世界を制覇して大いに富を得、我が宮殿において宝を雨ふらせること七日、積り積つて大衆の膝に至らしめようと考へたのだ。アーナンダよ、彼はそれを実際に行ない、自らも満足し、大衆をも満足せしめたと思つたのだ。しかしそれを成しとげるとまたまた野望が湧き上つた。この物質の世界ばかりでなく精神界の統主、天帝釈の座にまで登つてみようと思ひつたのだ。如意足、神通力を得た彼はここでもその目的を果すことができたのだ。三十三天の上の帝釈の法堂に入ると天帝釈は半座彼に与えて坐らしめたのだ。どうだろう。天帝釈と彼と、すべてに

差別がなく、その光と言ひ色と言ひ、礼節衣服まで全く同じではないか。ただ悲しいことにはその色、動き方だけが異つてゐたのだ。彼はそれに気づいたのだ。これはいけない。すがたかたちは同じでもやはり天帝釈の方が上だ。もうこうなつたら天帝釈を蹴落して全座を奪ひ、名実ともに物質界、精神界の大王になろうと思つたのだ。そう思つた瞬間、彼は地上に落ち大病人となつてしまつたのだよ。彼が命終るとき、家臣が来てこうたずねた。

「王よ、若し世人が来て王が世を去るとき、なんと言ひ残して逝かれたかと申されたら、どのように申しませうか」

アーナンダよ、よくお聞き、彼はこのように答へたのだ。

「自分は七宝を得ても心に満足することなくして命終り、大國を領しても心に満足することなくして命終り、七日宝を雨ふらせても心に満足することなくして命終り、世界を統治しても心に満足することなくして命終り、五欲を具足しても心に満足することなくして命

終り、天帝釈に半座を与えられても心に満足することなくして命終つたのだと、このように伝えてくれ」そしてお釈迦さまは次のような頌を歌われたのでした。

宝の雨をふらすとも
意に満足は得られまじ
欲は呈痛の基にして
樂は無欲の中にあり
金銀珠寶積み積み
ヒマラヤ山と競えども
欲はなお増しなお求め
意に満足は得られまじ
五樂五欲を捨て去りて
大慈悲心に生きるもの
これぞ仏の弟子と言ふ

(中阿含經六十、四洲經第三)

人間生きてゆく限り無欲では一日もすごされないとは思いますが、先ず足ることを知つてすべてに感謝しなければならぬと思ふのです。すべてをみ仏さまのおはからいとよろこべる心境に立つことができたらどんなにしかあわせなことでしょう。

藤井実応 著

『現代を生きる法然上人の宗教』を拝読して

須 藤 隆 仙

読者のみなさまは、本誌上にてつとにご高名をご存知と思いますが、藤井実応先生が、このほど『現代を生きる法然上人の宗教』という本を出版されました。

先生は岐阜県にお生まれになり、大正大学の前身である宗教大学をご卒業になり、それ以来今日に至るまで、ただ念仏の伝道一筋に歩まれているお方でございます。

有縁の方々の教化された数は、数えることのできないほどで、その間、浄土宗立教講習所主事、信行道場主事、国鉄教習所講師、住友豊橋青年学校長、東海学園高校講師などをつとめられ、若い人たちを導くところも甚大であります。

今回の書は、かつて信仰の雑誌などに載せたものの、あるいは講習会での講案を整理した

ものなどを、合して一本とされ、前記のような表題を付したものでありますが、それだけに全体として深く語りかけてくるものも感ぜられて、文字どおり『信仰の書』であります。

内容は「法然上人のお話」「一枚起請文のお話」「現代を生きる法然上人の宗教」の三篇からなり、一篇は上人の伝記を中心に念仏の教えの真髄を明かしたものであり、二篇は上人のご遺訓・一枚起請文の講話であって、念仏宗教にとっては、もつとも大切な信解であります。三篇は現代という複雑な社会機構の中で、念仏がどのような役割をはたすか、そしてどのような意義があるのか、ということとを勝れた筆致で書きあらわしたものであります。まして、教えられるところ多大であります。

いったい法然上人が浄土宗を開宗されたということの意義の根本は、どこにあるかと申しますと、それは仏教を真に宗教として開扉したところにあるのではないかと思ひます。

深い仏教の教義は、ときには学問のように取り扱われ、またときには道徳としてののみ取り扱われることがあります。法然上人は、仏教は学問や道徳ではない、宗教であるという立場から、そのことを宣明すべく浄土宗というものを開かれたのであります。

それでは学問、道徳と、宗教と、どう違うのかと申しますと、学問や道徳は「救い」ということを一ばんの問題とはしておりません。しかし宗教は「救い」ということが一ばんの問題なのであります。

学問をし過ぎて自殺する人があっても、法を犯して処刑される人があっても、学問や道徳はただそれだけであって、別に「救い」の手をさしのべてはくれません。

しかし宗教は違います。ノイローゼになった人にも、犯罪者にも、宗教は積極的に救い

の手をさしのべます。キリストさまが「不幸ものにこそ神の愛がある」といつているのもそのためであり、釈尊が凡夫のためにこそ最大の良薬たる「念仏」を説くのだと仰せられておられるのもそのためであります。

この宗教の本来を、仏教の上に見事に開花

せられたのが法然上人であられました。この法然上人のみ教えは、藤井先生のこの書によって、明らけく領解されるのであります。必読をおすめいたします。（愛知県宝飯郡小坂井町奈新屋17-19・著者発行・実費頒布）

昭和元禄

古賀秀宣

「昭和元禄」これは江戸中期元禄時代の天下泰平のみ世と類似する昨今に名づけられた名称ですが、何が類似しているのでしょうか。元禄時代における政治面での事件としては、大公方と称された五代將軍綱吉による「生類憐みの令」・忠臣蔵で知られる赤穂義士のかたき討ち等があげられますが、この点での対比は時代感覚、制度上の問題等で困難でしょう。宗教界ではどうでしょうか。

江戸時代の仏教界は、幕府の政治統制の強化と、従来の経済的地盤を失うことによって

中世の頃のような華やかな面影はなくなっていきました。むしろこのような時期にこそ宗教的特色を発揮すべきであったにもかかわらず、事実はその逆の道を歩んでいったのです。キリシタン追放のため寺請制度等による仏教の国教的扱い方によって、寺院と僧侶は特権に甘んじて墮落の色を深めたとされています。特に元禄時代にはこの傾向強くなったのですが、一面庶民の日常の宗教行事とのつながりが強まり、世俗的には繁栄していったのです。しかしこの傾向も町民のレクリエー

ション的色彩が濃く、宗教的意識はうすれつつあり、諸社寺の祭礼や法令にしても観光的になり、それまでの第一義的な宗教的意義から第二義的な方向に転換されたと見るべきでしょう。このような元禄時代の宗教界の動向は何か現在の宗教界の様に類似している点を見出し得るような気がいたします。うわべだけの宗教儀礼にまどわされることなく、本来の姿を再現する時期に来ているのではないのでしょうか。

このように考えられます昨今の世相は何かその見方をまちがっているかと思える。自由主義の乱舞が所により、時にまかせてなされております。もう一度素直な気持にもとつて、人としてのあり方を考えるべきではないでしょうか。

竹中信常著

『創価学会—その性格と活動』

(労働法学出版KK刊)
B六・一五八頁価四〇〇円)

創価学会には三つの顔がある。一つは日蓮正宗、一つは創価学会、いま一つは公明党である。たてまえとしては、創価学会は日蓮正宗の在家法華講、公明党は日蓮正宗の説く王仏冥合を実現するための政党となっているが、実際には、三者は創価学会を核とする三面一体像をなしている。昭和二十六年に第二代会田城聖会長が折伏大行進を号令したときは、会員三千余人、それから僅か六年間に一千万人と増大したことはまさに驚嘆に価する。昭和三十年前後から創価学会員が、神棚や仏壇は焼いてしまふ、創価学会日蓮正宗以外すべて邪教であるとして、既成教団には集団で押しよせて改宗を迫り、一般人や会社員や工場

労働者には病・貧・争をさそい水に、功德と罰論を楯にして入信を強要する事態がマスコミを賑わした。その頃から実態を調べようとする動きがでて、同三十二年頃から宗教学者既成教団の各宗各派による批判書が続々と出版されてきた。しかし、どの実態報告書も、批判書も、さきに述べた三つの顔のひとつをとらえ得ても全体を明らかにすることはできなかったといつてよい。しかし、その間に創価学会は、昭和三十年頃から北海道夕張炭鉱労働者へと折伏の魔手は伸び、第三代の池田大作会長の就任とともに、他宗攻撃的に教派神道や新興宗教へと拡がり、昭和三十四年の政界進出から同三十九年の公明党結成は、

ついに政党にも旋風をまき起し、ここに創価学会のまきおこした旋風の渦は、宗教界はもとより労組、政界、教育界などあらゆる分野全国各地をまき込んでしまった。

竹中信常博士が、今後新たに出版された「創価学会」の「はしがき」には「創価学会は今日の社会においては、これをぬきにしては、宗教はむろんのこと、政治も、教育も論ぜられず、近い将来には、経済さえ創価学会を無視しては、論ぜられぬ状況にある」と現状を述べておられる。このような状況にあつて要請されるものは、先に述べた三つの顔をいかに関連づけ、創価学会の一体像をいかに浮彫りにするかにあるといつてよい。すでに数多くの創価学会の批判書を出版されている竹中博士が本書の出版に意図したものは、このような要請にこたえようとするものである。本書には、著者が数年前から経済界とくに企業経営者のセミナーで論じてきたものを集録したこともあつて、いくつかの特徴がみられる。第一に創価学会についての正確な認識と評価とをめぐしている姿勢が絶えず保持されていること。そのためには客観性が

要求されるので、著者の主観的判斷や予測を
さけて、必要止むをえざるものに限って註で
述べていることなどである。このような姿勢
で、とくに企業關係にたずさわる人々を念頭
において、創価学会がどのようにして日蓮正
宗と結びつき驚異的な發展を遂げたのか、そ
して、その宗教的、社会的、政治的性格を追
求して、なぜ宗教団体である創価学会が政界
に進出して公明党を結成するに至ったのか、
そして最後に創価学会に対して企業体はどの
ような態度をとったらよいのか、を論じてい
る。

したがってこのような問題点を中心に創価
学会の三面一体像の浮彫りにつとめたために
「本書はいわば創価学会の入門書であるか
ら、創価学会についての一応の知識をもつ人
々には少々、ものたりない感をいだかせるか
もしれない」と著者は述べているが、たとえ
数十冊の創価学会に関する著作を読んでも、
これだけ鮮明に全貌をとらえたものはまずな
いといっても差しつかえはなからう。また
「創価学会に反発する、とくに宗教界、とり
わけ既成仏教の人々にとっては「切り込み」

のたりぬ、中途半端なものだという批判が出
ようかと思う」と述べておられるが、われわ
れが求めたものは重箱の隅をつくような分
析書ではなくて、全体像の浮彫りであり、竹
中博士がこのような要請にこたえてくれた待
望の書であるといえる。巻末には参考文献も
でているので、これからさらに研究しようと
する人々には指針を与えてくれる貴重な書で
ある。すでに創価学会に知識をもっている人
には整理と正しい認識を、また、これから創
価学会を知りたいと思う人には格好の入門書
となっている。紙数に限りがあるので、以下
目次を紹介するにとどまることは残念である
が、広く講読をおすすみたい。

序論 創価学会の生いたち

一 序

二 日蓮正宗について

三 創価学会について

四 両者のむすびつき

第一章 創価学会の性格と現状

一 宗教的性格

二 社会的性格

三 組織について

四 現勢について

第二章 創価学会の政治活動

一 政治への傾斜

二 公明政治連盟

三 公明党の成立と性格

四 公明党の組織と活動

五 学会と党との関係

六 折伏活動の方法と実態

七 折伏のエネルギー源

八 折伏運動の展開

九 政治進出のあと

一〇 選挙と折伏

第三章 創価学会の活動と労働問題

一 労働団体とのふれ合い

二 企業体とのふれ合い

三 企業体の対創価学会態勢

イ 思想的態勢

ロ 法規上の態勢

結語

付録

(藤井 正雄)

無量壽經(二)

和 三 部 記 經

法蔵菩薩の願いと決心



村 瀬 秀 雄

一 悦びに溢れる釈尊

その時の釈尊は身も心も大きな喜びに満ち溢れ、無上の楽しみにしたっている御様子であった。そこに列席している者からみると、釈尊のお姿は又となく清く麗わしく気高いものに拝されたのであった。

阿難尊者は釈尊に一礼してから立ち上り右肩の袈裟を脱いで跪き、改めて釈尊に合掌礼拝してから釈尊に申し上げた。

「今日の釈尊を拝すると、お身体の中には喜びと楽しさだ満ち溢れているように思われる。お姿はまことに清く麗わしく、お顔は輝いておられ、たとえば巍然と聳え立った山のように気高く拝される。よく磨かれた鏡はすべてものの表も裏も透き通して映し出すが釈尊にはそのような透徹さを感じられる。いつも釈尊はこの上もなく光り輝くご威光を持つておられるが、しかし今日のように妙なるお姿を拝したことは、いまだかつてなかったところである。

今日の釈尊こそは、心の内に尊く勝れた法をお持ちになつていて、悟りの境地に安住さ

れているのに相違ない。たとえば世の雄者として諸仏と同じ境地におられるようなものである。更にまた世の眼目として人々をお導きになるために、万人に勝れた智慧をお持ちになり景勝の道におられ、たしかに如来と同じ徳をすべて具えておられるのである。諸仏はこれまで釈尊を念じ給うてきたが、今日の釈尊は過去、現在、未来にわたるすべての諸仏を念じておられるようである。

今日の釈尊を拝すると、このように思われるのであるが、どうしたわけでこうまで光り輝くご聖徳を持つておられるのであろうか。これにはさぞ何か特別な理由があることと思われる」

釈尊はこの質問に答える前に、まず阿難尊者にたずね

「阿難よ、汝の問う言葉は天人が来つて汝に教えたものであるか。それとも自分自身の考えから問うたものであるのか」

阿難尊者は答えた。

「私の質問は天人から教えられたものでなく私の所見のままを問ひ奉つたのである」

そこで釈尊は改めて阿難尊者に答えられた

「阿難よ、まことに善いところに気がついた。汝の言葉は快く受け入れるであらう。まさに汝の言葉は深い智慧から出たものであって、しかも巧みな表現によって真実を伝えたものといえる。汝は日頃から人々をあわれみ救いたいと願っているからこそ、このような問いを発することになったのである。

如来は尽きることのない大悲悲によって迷いの世界の人々をあわれみ救わんとしている。そのためにこの世に出現し、広く仏法を説き、多くの人々を救い、真実の利益を与えようとしているのである。しかし人々が仏法に遇うことは無量億劫という長い間をかけても容易に遇えないものである。論えば三千年に一度だけ開花するという靈瑞華の花をみるのと同じく難しいことなのである。

今汝が問うたことは利益するところが多く一切の諸天や人々に対して智慧を開かせるものである。阿難よ。次のことをよく知らなくてはならない。即ち如来の悟りは、その智慧が深いために容易に知ることのできないといふものの、十分に人々を救うことができる。この智慧は誰からも決して邪魔されたり、抑

制されたりされるものでない。

また如来はわずか一回だけの食事によって限らない寿命を保つことができ、しかも身体は常に喜びの相を持続し、容色は気高く、顔は光り輝いている。その理由は何かといえは如来は禪定と智慧を極めていて、一切の法を得会しているからである。

阿難よ、あきらかに聞け。今汝のために法を説くであらう。

阿難尊者は答えた。

「はい。願わくは釈尊の説法を、謹んで聞き奉りたい」

註

1 右肩の衣を脱ぐことは印度の礼法。

二 法蔵菩薩の願いと決意

そこで釈尊は、阿難尊者に法を説かれた。

「遠い昔のことであるが、この世に錠光如来と申された仏があつて、多くの人々を教化されたが、やがて御自身も入滅された。次いで光遠如来、月光如来というよう如来が次々に世に出られ、多くの人々を教化してから入滅された。このようにすべて五十三仏が世に出

られたが、いずれの仏も入滅された。^①

そして第五十四番目に世に出られた仏は世自在王如来であつた。如来のことを応供、等正覚、明行足、善逝、世間解、無上士、調御丈夫、天人師、仏、世尊^②と申し上げる。

その時代に一人の国王があつた。この国王は世自在王仏に帰依し、仏の教えを受け、いつも心楽しい思いをしていた。その内に自分も悟りを求めたいという心をおこした。そこで国王は王位から去り、国を捨てて、沙門^③となつて、名を法蔵と改めた。

法蔵比丘は天性豊かな才能に恵まれていた。賢い上に勇ましく、多くの人に混つて早くから頭角をあらわしていた。

法蔵比丘は世自在王仏に詣でて、御足をいただいて礼拝し、右から三度仏を周つて再び礼拝し、跪いて合掌し、讃歌^④を以て仏の御徳をたたえた。

『輝く来如の御顔は巍々として、聖徳はこの上なく尊い。如来の輝きは他に較べるものがない。もえさかる太陽の光りも月の光りも、また宝玉の光りも、如来の前にあつてはその輝きを失い、墨をぬったかの如くに暗く、姿

を消したかの如くかくれてしまふ。如来の容顔はすべてを超えて気高く、他に較べるものがない。如来の悟りの説法は、その大音声が十方世界にくまなく流れる。持戒と精進と智慧とを積まれ、その威徳はこの上なく勝れ、他に較べものがない。如来の法は深遠であり清明である。法を心に念じて、奥深くすべてを極めていく。如来は当初から愚かさ、貧り怒りの心を持っていなかった。如来こそ人中の雄であり、獅子王であり、無量の神徳をもっている。その功徳は廣大であり、智慧は深好である。その光明は一切世界を震動し給うている。

願くは、私もまた仏となって世自在王仏と同じく、生死の世界から抜け迷いの世界から解脱したいものである。修行にあたって施しを行い、戒を保ち、貪りを抑え、忍ぶ心を以て耐えてゆくが、中でも禪定と智慧とが最も肝要であると知らなくてはならない。

私は誓う。私が遂に仏の位につくまでは必ずこの願いを修行し、仏となったならば生死の苦しみに恐れ戦し一切の人々を必ず苦から救うであらう。たとい百千億万の仏がいたに

しても、たとえガンジス河の砂の数ほど多数の如来がいたにしても、これら諸仏を供養することをやめて、あくまで悟りの道を求めるために堅固な心と正しい心を持ち続けてゆき決して修行を中途で止めることなく、自分が仏となるための努力を続けるであらう。

たとい諸仏の世界がガンジス河の砂のように数え切れない程に多くあっても、私が仏となった時の光明は、諸仏の世界をくまなく照らし、全世界に及ぼすであらう。私が仏となった時の浄土はあらゆる仏国土の中の第一のものとするであらう。浄土には勝れた道場があつて、そこにくる人々はみな立派な特色をもつというように、浄土をして他にみられない勝れたものとしたい。

私は一切の人々を慰み、苦の世界から悟りの世界にわたすであらう。もし十方世界から私の浄土に往生する者があれば、みな楽しみを受け、安穩に過すことができて、清浄な喜びに侵ることとなるのであらう。

願わくは世自在王仏よ、真の証人として私の願いと決心とを証明していただきたい。私はまさしく本願をおこし、欲する所に向つて

努力するであらう。十方世界の諸仏の智慧は何ものにも妨げられることがないが、諸仏たちも同じく私の願うところを知っていただきたい。たとい私の身が多くの悪苦に沈もうとも、私は自分の修行を続けるのに努力精進するであらう。私は忍耐強く修行をし、決して後悔することがないであらう』

註

1 五十三の如来がこの世に出現し、入滅したので、これを五十三過去仏という。これに対して阿弥陀仏は現在もなお説法を続けられている。

2 如来に対して十の異名をあげているのでこれを如来の十号という。応供は供養を受ける資格がある人の意。等正覚は平等の正覚を得た人の意。明行足は智慧と修行とを完成した人の意。善逝は再び迷わない人の意。世間解は世間の事に通じた人の意。無上士は無上に尊い人の意。調御丈夫は衆生を調伏し制御する人の意。天人師は天人の師となる人の意。仏は覺者。世尊は世の尊い人の意。

3 沙門は出家して、仏道を修行する人。

4 比丘は出家した男子。

5 師に対する礼式。

6 この一節は仏徳を讃えたもので、歎仏頌という。

三 浄土を選択したい

法蔵比丘は世自在王仏を讃え、願いを成就させることを誓ってから、更に言葉をついた。

『世自在王仏よ。私はこの上なく勝れた悟りを求める心をおこした。願わくは仏よ、私のために広く教えを垂れ給え。私はまさに修行して、清浄にして莊嚴無量の浄土を構えたいと願っている。それにはどのように浄土を莊嚴したらよいのか、もしも幾つかの仏国土を見ることのできたならば、私はその中から選択して、自分の浄土の莊嚴をしたいと思う。私をして速やかに悟りを開けるようにし、多くの人々を救って生死の苦難の根元を取り除くようにして欲しい。』

すると世自在王仏はいった。

『汝が修行し、それによってもちたいと願っている浄土については、その構想も莊嚴もす

でに汝自らがよく知っているとこである』

この言葉の意味を解しかねた法蔵比丘は、かさねて世自在王仏に質ねた。

『仏よ、いま申されたお言葉は広く深い意味をもっていて、未熟者にとつて理解すること難しい。願わくは諸仏の修行された方法と現に構えている仏国土について詳しく説き明して頂きたい。私は仏の説法を拝聴し、それによつて修行し、私の願うところを成就させたいのである』

世自在王仏はこの言葉を聞いて、法蔵比丘が抱いている願いが見識高いものであり、深広な内容を持つてゐることを知った。そこでたとえをあげて説法された。

『大海の水は無限の量をもっている。しかしいかに無限の水であつても、ある人が大海を一升料で汲み尽したいと決心し、限りなく多くの時間をかけて努力してゆくならば、大海の水といえども遂には汲みとられる時期がある筈である。そしてその人は必ずや海底に潜む宝を手にすることができようであらう。』

これと同じく真実の心をもつて専心に努力を続け、悟りの道を求めて止めなかつたなら

ば、その人は必ず目的を果すことができるに違いない。汝がいまどのように深広かつ偉大な願いをもつたにしても、努力によつていつかは必ず成就されるであらう』

註

1 經典には「莊嚴無量の妙土を撰取すべし」といい、更に「時に法蔵比丘、二百一十億の諸仏妙土の行を撰取す」とある。善導には撰取はとり入れるという意味で、自分の構想の中にとり取れることであるが、法然上人は、この撰取という言葉は選択するという意味であるとの解釈を下された。即ち「無量寿經のころ、また選択の義あり。いわく二百十億の諸仏の妙土の清浄の行を撰取すという。これなり。選択と撰取と、その言葉異なると雖も、そのころ同じ。然れば不清浄の行を捨てて、清浄の行を取るなり」(選択本願念仏集)といひ、法蔵比丘は仏国土自分の構える浄土を決めたいと願ひ、これに対して世自在王仏が二百十億の仏国土を見せた。法蔵比丘はこれらの中から選択を重ねて、決められたのが極楽浄土なのである。

編集後記

▽桜花りよう乱と咲きはこり、森羅万象ことごとく、みずみずしい生命の息吹きにつつまれる陽春四月八日大聖釈迦牟尼世尊は降誕あそばされた。爾来二千五百年、説かれたみ教えは、かぎりなくひろがる人類の苦悩を救い、歴史のながれにあらたな栄光をかかげつつけたのである。現代において、その栄光は失せることはない。しかし、法は人によるたとえの如く、正法弘通の浄業が失われたとき仏陀の光もまた輝きを失うであろう。▽宗教的な生面が枯渇し、正法が伝播されず、ただ時代に迎合した邪教のみが流行することは全く寒心に堪えない。▽釈尊の降誕を迎え、更めて眞精神を味いかみしめて正法弘通のひたぶるな情熱を鼓舞したい

ものである

▽その意味で、作家の武田泰淳氏、中央公論総務部部長の宝田正道氏を囲む座談会は恰好のものである。両先生とも僧門を出て一般社会で活躍されておられるが、言葉の端々に宗門に対して限らない愛情を示しておられる。「法然上人がすきでたまらん」といった、いわば上人の全人格に傾倒している態度が両先生には感じとられる。▽久びさ、明石の山口諦存師、京都の賀幡亮俊師から玉稿をいただき誌面を飾ることができた。尼ヶ崎の三枝樹隆善師は仏大の新進学者である。御期待いたしたい。▽開宗八百年記念準備のうごきがポツポツなされているが、その一事業として浄土宗辞典の編纂がある。東西の若い学徒が中

心となってカード整理をしているが、仲々大変な事業である。この辞典は、百科事典的な要素も加味されており、多に期待されるものである。

▽過日京都、奈良方面へ旅行する機会を得た。近年とみに社寺の観光化が論議をかもしたしているが、所々で痛切に感じ取ることができた。中には京都の西芳寺奈良の中宮寺のように本堂を再建し、布教の意をくみとることができたが、ほとんどの寺院はその表面に観光的色彩を強くいだかせているのが現状のようです。これはなにも古都京都・奈良のみの問題ではありません。私達とて、この問題について心から考えなおす時期に来ていることを認識すべきではないでしょうか。人々が心の底から親しめる寺院でありたいものです。

「浄土」講読規定

一部 定価 金六十円

(送料 六円)

会費一力年 金七二〇円

(送料 不要)

浄土 四月号

昭和十年五月二日

第三種郵便物認可

昭和十三年三月二十五日 印刷

昭和十三年四月一日 発行

定価 六十円

編集人 宮林 昭彦

発行人 佐藤 密雄

印刷人 関 二三男

印刷所 新光社印刷株式

会社

東京都千代田区飯田橋一ノ十二ノ六

発行所 法然上人顕仰会

電話東京二六二二五九四四番

郵便東京八二一八七番

信仰・教養の手引

松 濤 弘 道 著

現代人の指標

190頁 B6版
定価500円 750円

松 濤 弘 道 著

仏教徒必携

142頁 新書版
定価300円 750円

海外生活11年の著者が世界的視野に立って現代人のために、仏教信仰のあり方と浄土宗信仰による人生観の確立を強調。とくに後者はひろく信徒のための手引書として好適。 10p以上1割引。

図書館協会すいせん図書

創 価 学 会

——その性格と活動——

竹 中 信 常 著

本書は著者が手がけてきた創価学会研究の総まとめで、しかも、現下もつとも問題とされている政界、実業界、労働組合と学会とのふれ合いについて平易に叙述したユニークな著作、本年六月参院選をひかえ、創価学会の性格を知り、その活動方針を見究めるための必読の入門書として図書館協会のすいせんをうけた。

労働法学出版社刊
以上本会にて取扱います。

定価 400 送料70円

新刊 藤 井 実 応 著

「生きる歩み」

領価 200円 送料 45円

ハガキ通信、15年分をまとめたもの

申込先 愛知県宝飯郡小坂井町伊奈新屋

藤 井 実 応

振替名古屋27462番

最近刊 浄土宗徒待望の好著

佐藤密雄 著

仏教々団の成立と展開

著者のもつとも得意とする仏教々団の規律と統制の問題を分りやすく概説し、現在の仏教々団の在り方に多大の示唆を与える。

林 靈法 著

仏との出会い

現在仏教界における革新的思想の第一人者たる著者が若き日の苦難と思想遍歴を通じて到達し得た浄土教信仰を余すなく描き尽す。

竹中信常 著

日本人と仏教

法然上人と念仏信仰とをひろい視野のもとに、現代日本人の思想構造のうえに位置つけた好著

以上いずれも

教育新潮社刊

定価 六〇〇円

送料 七〇円

◎ 当方にてお取次ぎいたします

◇ 浄土トラクト ◇

四季の寺まいり (再版)	安居香山 著	価30・〒15
浄土宗のおしえ (四版)	宮林昭彦 著	価30・〒15
諸仏の戒め	村瀬秀雄 著	価5・〒15
一枚起請文をめぐる	村瀬秀雄 著	価120・〒35
選択集私解	竹中信常 著	価120・〒35
ものいう石	竹中信常 著	価150・〒45

多数お申込みには割引いたします。施本にご利用下さい

発行所 法然上人鑽仰会 TEL (262) 5944
振替東京 82187